

山形県におけるお薬手帳活用度調査 第6報

在宅でお薬手帳に求められているもの

武田真美子、相原 由香、石井 裕美、石川 彩乃、伊藤 順子、遠藤 彰則、岡寄千賀子、櫻井 可奈子、佐藤 一子、新田 幸男、半田 貢康、真壁 幸恵、渡邊 邦章、武田 直子、服部 智彦

社団法人山形県薬剤師会

【目的】山形県では、医師会・歯科医師会と三師会合同で「診療お薬手帳」を作成し、普及に努めてきた。今まで我々はお薬手帳の活用状況について、患者様・開局薬剤師・病院薬剤師・医師に対してアンケート調査を実施し、本学術大会において発表してきた。今回は、在宅医療の現場で訪問看護師が薬の情報をどのように管理しているのかその現状と問題点を探り、多職種協働における情報の共有化の具体的方法を考察した。また、在宅における「お薬手帳」の位置付けを確認し、情報の媒体としてお薬手帳の果たす役割を検証した。

【方法】平成20年5月9日から5月23日までの2週間で、山形県訪問看護ステーション連絡協議会加盟施設の看護師242名を対象に、患者様の薬への関与・薬剤関係情報の入手手段・お薬手帳の活用度・お薬手帳への記載希望事項・在宅医療における薬剤師への要望等についてのアンケート調査を行った。

【結果および考察】アンケート用紙の回収は198名(82%)であった。訪問看護師の薬の服用への関与は多く、服薬確認・患者家族への助言援助の他、類似薬のチェックまで踏み込んでいる看護師も15%いた。薬に関する情報は、薬剤情報提供書・書籍から得ており、自らの医師への働きかけで処方変更・中止を経験している人も67%と多かった。お薬手帳の存在を94%の人が知っているが、お薬手帳から情報を得ている人は30%と少なかった。また、お薬手帳から重複・副作用等の問題点を発見した人はほとんどなく、看護師が活用できる情報が不足しているものと思われた。お薬手帳記載事項への要望は、副作用・薬効・患者様の服用に関して注意すべき点・併用禁忌薬が高い。一方、相互作用記載の要望は半数以下と少なく、専門的な知識が求められている分野と考えていると思われる。在宅で薬剤師に関与して欲しいことは、飲み合わせのチェック・効能の説明・副作用チェック・剤型の選択等の薬学的管理であった。現在の在宅における薬は、患者と症状をつなぐ「治療のための一つのアイテム」でしかなく、薬学的見地に立った管理が欠如していることが伺える。適切な薬学的管理が行われるためには、手帳記載内容の検討が必要と思われる。我々はこれまでの調査を元に、他職種からお薬手帳に求められる情報が何であるかを明らかにし発信していく必要がある。